

我らの罪をもゆるしたまえ

主イエスが弟子たちに教えられた「主の祈り」の第5の祈願は「我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ」である。これは赦しと和解を求める祈りである。赦しなしには生きられない人間の魂の心底からの祈願だといっていい。

文語訳で「罪」と訳されているのは、原文では新共同訳が訳しているように「負い目/負債」という語であるが、これは罪を表すユダヤ的表現である。罪とは人間が神に対して負っている、返済することのできない負債のようなものである。人はアダム以来、皆、罪の負債をかかえて生きている。

神から与えられた尊い命を罪によって汚してしまった人間の責任の重さを詩編の記者は次のように言っている。「まことに人はだれも自分のいのちをつぐなうことはできない。その命の価を神に払うことはできない。とこしえに生きながらえて、墓を見ないために、その命をあがなうには、あまりに価が高く、それを満足に払うことができないからである」（詩編49:7～9/口語訳）。そのように、人間は聖なる神の前に罪の負債者であり、道徳的・霊的破産者であり、その結果は死であることを詩編の記者は語る。

これが神の御前における人間の現実であることを認めるところから聖書の宗教、キリスト教信仰は出発する。私たちは、神の赦しなしには、一日たりとも生きられない存在なのであり、聖なる神の前に立つことが出来るためには、私たちの罪は贖なわれることが絶対に必要である。

これこそ、罪なき神の御子キリストが十字架で死なれ、贖いの血をながされたということの意味である。罪の贖いなしには人の救いはないのである。キリストの十字架が「福音」と呼ばれるのは、これが罪を贖い、罪を赦す神の恵み以外の何ものでもないからである。

使徒パウロは言う、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです」（ローマ3:23～26）。

キリストが十字架において私たちに代わって肉を裂かれ血を流して下さって、私たちのために罪の贖いとなって下さったということにキリストの福音の真髄がある。キリスト者とはこのキリストの血という代価によって罪贖われ、神の前に赦された存在であり、日々その赦しに生きる存在である。そして、その赦しがあればこそ、自分に対して罪を犯す隣人に対してもそのように赦しをもって生きることができるのである。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたも同じようにしなさい」とパウロも勧めている通りである（コロサイ3:12～14/マタイ18:21～35参照）。